

大学生は”進学校の呪縛”からどのようにして

自らを解放していくのか？

—M-GTAによる分析—

How university students liberate themselves from the “curse of first-class high-school”

-A qualitative study with M-GTA-

○葛西 優花 斎藤 清二

○Yuka KASSAI Seiji SAITO

立命館大学総合心理学部

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

Key words: 不本意入学, 進学校の呪縛, 修正版グラウンデッドセオリーアプローチ

<問題と目的>

大学生の不登校は、最近の数年間で様相は変化したもの
の1979年から現在まで増加傾向にある(内田, 2011)。
一方で不本意入学は大学生の不適応増加の大きな理由と
されている。不本意入学者を類型化し特徴を分析する研
究(伊藤, 1995 他)は認められるが、そのような学生
が、大学生活を通じて、挫折体験をどのように変容させ
ていくかというプロセスを、当事者の視点から描き出
した研究はこれまでほとんどない。

本研究では、大学受験失敗を経て第二志望以下の大学
に入学した大学生に焦点を当て、彼らの体験プロセスを
丁寧に描き出すことを試みる。

<方法>

第一志望大学の受験に失敗し、現在はx大学y学部に
在籍している、いわゆる「進学校」出身の大学3年生の
女性4名を研究協力者とした。語りは1対1の半構造化
面接によって聴取され、録音・逐語化された。作成され
た逐語録をデータとして、修正版グラウンデッドセオリ
ーアプローチ(M-GTA)による分析を行った。

<結果と考察>

M-GTAによる分析の結果、19個の概念と6つのカテ
ゴリーが生成された。研究協力者の体験は「挫折からの
回復」というストーリーというよりはむしろ、「進学校出
身者が『進学校の呪縛』から自らを解放し主体的に前進
していくプロセス」として描き出すことが可能であった。

分析によって得られたストーリーラインの概要を以下
に示す。(【 】は概念、< >は大カテゴリー、《 》は
小カテゴリーを現す)。

進学校出身者は、同級生の実績や教師たちからの影響
によって【ネームバリューへのこだわり】を身につける
ようになり、現在の在籍大学を【” 滑り止め”】として見
るようになる。それらは<進学校の呪縛>として働く。

そして、大学受験において、彼らは<選択>を迫られ
ることになる。それは、【在籍大学への合格】で生じた緩
みが招いた不合格による、浪人という選択肢である。し
かし、彼らは【浪人をしないという選択】を行い、在籍
大学に入学する。

入学した彼らを待っているのは自分との《闘い》であ
る。内部進学者に【入学までの過程の違い】を感じ、は
っきりした対象でもない【他者の目が気になる】。自分を
守るために【高校の同級生への優越感】を感じようとし、
自分が分からなくなって【大学入学後の苦闘】へと走る。
しかし、時間とともに【在籍大学の魅力】を感じるとよ
うになり、【有名大学に入学した友人の話】を聞くことで、
《価値観の変化》が起こる。これら全てが<解放に至る
過程>を促進する。また、同時に、自分の<不合格とい
う事実の受け入れ>を行えるようになる。自分の【努力
不足を痛感】し、様々な体験から【大学への意味づけ】
を再構成する。また、入学後、一瞬で【過ぎ去る日々】
の中で奔走し、いつの間にか過去に折り合いをつけたり、
その焦りによって自分の気持ちに【見て見ぬふり】をし
たりする。そして、進学校の呪縛は次第に揺らぎ始める。

ついに、進学校の呪縛によって知らず知らずのうちに
強制されていた【学歴至上主義の崩壊】を迎える。それ
によって自分の過去から【スイッチの切り替え】を行い、
視点は未来へと移り、【将来の展望】を明確に意識するよ
うになり、彼らは、<解放・前進>のプロセスを歩むこ
とになる。一方で、どの時点においても【家族の影響】
は進学校出身者に対して強く働き続けている。

参考文献

- 内田千代子(2011). 大学における休・退学、留年学生
に関する調査 第31報 第32回全国大学メン
タルヘルス研究会報告書(平成22年), 80-94.
伊藤美奈子(1995). 不本意就学類型化の試みとその特
徴についての検討 青年心理学研究, 7, 30-41.